霧の不二、月の不二

――明治三十六年八月七日御殿場口にて観察――

小島烏水

青空文庫

不二より瞰るに、眼下に飜展せられたる凸版地図の如き平原の中白面の甲府を匝ぐりて、毛ばだちたる鰲の波を畳み、その波頭に鋭峻の尖りを起てたるは、是れ言ふまでもなく金峰山、駒ヶ嶽、八ヶ嶽等の大嶽にして、高度いづれも一万尺に迫り、必ずしも我不二に下らざるが如し、不二は自らその高さを意識せざる謙徳の大君なり、裾野より近く不二を仰ぐに愈よ低し、偉人と共に家庭居するものは、その那辺が大なるかを解する能はざるが如し。この夏我金峰山に登り、八ヶ嶽に登り、駒ヶ嶽に登る、瑠璃色なる不二の翅脈なだらかに、絮の如き積雪を膚の衣に著けて、悠々と天空に伸ぶるを仰ぐに、絶高にして一朶の芙蓉、人間の光学的分析を許さゞる天色を佩ぶ、我等が立てる甲斐の山の峻峭を以てするも、近づいて之に狎るゝ能はず、虔しんでその神威を敬す、我が生国の大儒、柴野栗山先生讃嘆して曰く「独立原無競、自為衆壑宗」まことことに不二なくんば人に祖先なく、山に中心なけむ、甲斐の諸山水を跋渉しての帰るさ、東海道を汽車にして、御殿場に下り、登嶽の客となりぬ。

旅館の主人、馬を勧め、剛力を勧め、蓆を勧め、編笠を勧む、皆之を卻く、この極楽の山、只一本の金剛杖にて足れりと広舌して、朝まだき裾野を往く。

市街を離れて里許、不二の裾野は、虫声にも色あり、そよ吹く風にも色あり、色の主を花といふ、金色星の、夕下界に下りて、茎頭に宿りたる如き女郎花、一輪深き淵の色とうたはれける朝顔の、闌に秋に化性したる如き桔梗、蜻蛉の眼球の如き野葡萄の実、これらを束ねて地に引き据ゑたる間より、樅の木のひよろりと一際高く、色

波の旋律を指揮する童子の如くに立てるが、その枝は不二と愛鷹とを振り分けて、殊に愛鷹の両尖点（右なるは主峰越前嶽にして位牌ヶ嶽は左の瘤ならむ）は、躍つて梢に兎耳を立てたり、与平治茶屋附近虫取撫子の盛りを過ぎて開花するところより、一里茶屋に至るまで、焦砂を匂はすに花を以てし、夜来の宿熱を冷やすに刀の如き薄を以てす、雀おどろく柒萸に、刎ね飛ばされて不二は一たび揺曳し、二たびは青木の林に落ちて、影に吸収せられ、地に消化せられ、忽焉として見えずなりぬ、満野粛として秋の気を罩め、騎客草間に出没すれども、惨として馬嘶かず、この間の花は、礵撫子、蛍袋、擬宝珠、姫百合、※茎、唐松草等にして、木は百中の九十まで松属の物たり。

一里松附近より、角度少しく急にして、大木を見ず、密々たる灌木、疎々たる喬木の混合林となりて、前者を代表するに萩あり、後者には栗多く、それも大方は短木、この辺より不二は奈良の東大寺山門より大仏を仰ぐより近く聳え、半より以上、黄衫は古びて赭く、四合目辺にたなびく一朶の雲は、垂氷の如く倒懸して満山を冷やす、別に風より迅き雲あり、大虚を亘りて、不二より高きこと百尺許なるところより、之を翳し、山膚に皹を入る。雲消えて皹も亦拭ひ去らる、山色何の瑠璃ぞ、只だ赭丹赭黄なる熔岩の、奇醜大塊を、至つて無器用に束ねて嶄立せるのみ、その肩を怒らし胸を張れるを見て、淑美なる女性的崇高を知らず。

馬返しより太郎坊まで、羊歯の小自由国や、蘚苔の小王国を保護して、樅落葉松の純林、戟を揃へて隣々相立てるあり、これありて裾野の柔美式なる色相図に、剛健なる鉄錆色を点し、無敵の冬をも呵して、一路空山料峭の天に向ひて立つものあるなり。

太郎坊を出づるや一変して喬木を見ず、灌木はミヤマ榛の木の痩せさらばひたるが僅に数株あるのみ、初めは草一面、後は焦沙磊々たる中に、虎杖、鬼薊及び他の莎草禾本を禿頭に残れる二毛の如くに見るも、それさへ失せて、霧沸々として到るに遇ふ、天そゝり立つ大嶽とは是れか、眼前三四尺のところより胴切に遇ひて、殆んど山の全体なるかを想はしむ、下界屡ば見るところの井桁ほどなる雲の穴より或は鰾を延ばし、或は畳めるは、応にこの時なるなからむや、今は山と、人と、石室と、地衣植物と、尽天地を霧の小壺に蔵せられて、混茫一切を弁ぜず、登山の騎客は悉く二合二勺にて馬を下る。

二勺より路は黒鉄を鍛へたる如く、天の一方より急斜して、爛沙、焦石、截々、風の噪ぐ音して人と伴ひ落下す、偶ま雲を破りて額上微かに見るところの宝永山の赭土より、冷乳の缸を傾けたる如く、大霧を揺るよと見る間に、急瀬上下に乱流する如くなりて、中霄に溢れ、片々団々、※れて飛んで細かく分裂するや、シヤボン球の如き小薄膜となり、球々相摩擦して、争ひて下界に下る、三合四合、皆天には霧の球、地には火山の弾子、五合目にして一天の霧漸く霽れ、下に屯めるもの、風なきに逆しまに※がり、故郷を望んで帰り去なむを私語く。この登山に唯一のおそろしきものゝやうに言ひ做す、胸突八丁にかゝり、暫く足を休めて後を顧る、天は藍色に澄み、霧は紫微に収まり、領巾の如き一片の雲を東空に片寄せて、透きわたりたる宇宙は、水を打つたるより静かなり、東に伊豆の大島、箱根の外輪山、仙窟に醸されたる冷氷の如き蘆の湖、氷上を跣べりて僵れむとする駒ヶ嶽、神山、冠ヶ嶽、南に富士川は茫々たる乾面上に、錐にて刻まれたる溝となり、一線の針を閃かして落つるところは駿河の海、銀の砥平らかに、浩蕩として天と一に融く。

銀明水に達したるは午後七時に垂んとす、浅間社前の大石室に泊す、客は余を併せて四組七人、乾魚一枚、麩の味噌汁一杯、天保銭大の沢庵二切、晩餐の総べては是の如きのみ、葉マキ虫の葉を綴りて寝ぬる如く、一同皆蒲団に包まりて一睡す。

夜九時、大風室を四匝せる石壁を透徹して雷吼す、駭魄して耳目きはめて鋭敏となり、昨夜御殿場旅館階上の月を憶ひ起し、一人窃に戸を排して出で、火孔に吹き飛ばされぬ用心して、這ふが如く剣ケ峰に到り、その一角にしがみ附きて観る。

霧収まりて天低う垂れ、銀錫円盤大の白月、額に当つて空水流るゝこと一万里、截鉄の如き玄沙※忽として黒玻璃と化す。雲の峰一道二道と山の腋より立ち昇りて、神女白銀の御衣を曳いて長し、我にいま少し仙骨を有するの自信あらば、駕して天際に達する易行道となしたりしならむ、下は即ち荒※として、裾野も、森林も、一面に大瀛の如く、茫焉として始処を知らず、終所を弁ぜず、長流言はずや、不二の根に登りてみれば天地は、未だいくほども別れざりけりと、まことや今日本八十州、残る隈なく雲の波に浸されて、四面圜海の中、兀立するは我微躯を載せたる方幾十尺の不二頂上の一撮土のみ、このとき白星を啣める波頭に、漂ふ不二は、一片石よりも軽且小なり、仰げば無量無数の惑星恒星、爛として、吁嗟億兆何の悠遠ぞ、月は夜行性の蛾の如く、闌けて愈よ白く、こゝに芙蓉の蜜腺なる雲の糸をたぐりて、天香を吸収す、脚下紋銀白色をなせる雲を透かして、僅に瞰ひ得たり、この芙蓉の根部より匐枝を出だしたる如き、宝永山の、鮮やかに黒紫色に凝固せるを、西へと落ちたる冷魂の、錆におぼろなる弧線を引いて、雲と有耶無耶の境地

に澄みかへれるは本栖湖にやあらむずらむ。雲は寄る寄る崖を噛んで、刎ね返されたる倒波の如きあり、その下層地平線に触れて、波長を減じたるため、上層と擦して白波の泡立つごときあり、之を照らすにかの晃々たる大月あり、その光被するところ、総べてを化石となす、試に我が手を挙ぐるに、晶きこと寒水石を彫り成したる如し、我が立てる劒ヶ峰より一歩の下、窈然として内院の大窖あり、むかし火を噴きたるところ、今神仙の噫気を秘蔵するか、かゝる明夜に、靉靆として立ち昇る白気こそあれ、何物たるかを端知せむと欲して、袖庇に耐風マッチを擦するも、全く用を成さず、試に拳石を転ずるに、鳴鏑の如く尖りたる声ありて、奈落に通ず、立つこと久しうして、我が五躰は、悉く銀の鍼線を浴び、自ら駭くらく、水精姑く人と仮幻したるにあらざるかと、げに呼吸器の外に人間の物、我にあらざるなり、おもひみる天風北溟の荒濤を蹴り、加賀の白山を拍ちて旋へらず、雪の蹄の黒駒や、乗鞍ヶ嶽駒ヶ嶽を掠めて、山霊木魂吶喊を作り、この方寸曠古の天地に吹きすさぶを、永冷歯に徹し、骨に徹し、褞袍二枚に夜具をまで借着したる我をして、腮を以て歯を打たしむ、竟に走つて室に入り、夜具引き被きて、夜もすがら物の怪に遇ひたる如くに顫きぬ。

翌朝四時十五分といふに、床を蹴る、未だ日の出を見ずして、大島、利島、御蔵島の、糢糊の間に活きて游ぶにあらざるかを疑ふ、三浦半島と房総と、長虫の如く蜿ねりて出没す、武甲の山は純紫にして、蒸々たる紅玉の日、雲の三段流れに沁み入りて、眩光を斜に振り飛ばすや、劒ヶ峰の一角先づ燧を発する如く反照し、峰に倚れる我が髭燃えむとす、光の先づ宿るところは、棟高き真理の精舎にあるを念ふ、太陽なる哉、我は現世に在りて只太陽を讃するのみ、顧れば甲武の山の若紫を焼いて、山肩茜色の暗潮一味を刷く。

下りて七合目に至る、霜髪の翁、剛力の肩をも借らず、杖つきて下山するに追ひつく、郷貫を質せば関西の人なりといふ、年歯を問へば、即ち対へて曰く、当年八十四歳になります！

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆58　月」作品社
　　1987（昭和62）年8月25日第1刷発行
底本の親本：「小島烏水全集　第四巻」大修館書店
　　1980（昭和55）年3月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※「劒ヶ峰／剣ヶ峰」の混在は底本の通りです。
入力：土屋隆
校正：門田裕志
2006年9月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霧の不二、月の不二

――明治三十六年八月七日御殿場口にて観察――

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　小島烏水
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/